



私のお母さん



らくだ

はじめに

2003年・春、私はAcademic writing（英語）という授業を受講した。この授業ではセメスターを通して、一つの英語のエッセーを完成させていくもので、毎授業でその1パラグラフの原稿を書く事などの課題が出る授業だった。テーマはFamily History Project.つまり、自分の親族についてエッセーを書くものであったが、その親族を選ぶに当たって、明確な条件があった。それは、既に亡くなっていること。さかのぼれば、いくらでもいらっしゃるご先祖様。でも、あまり昔の人じゃ、調べるのがすごく大変そう……。大体みんなは、おじいちゃん、おばあちゃんを選んでた。私は、母方の祖父が既に亡くなっていたが、自分が生まれる前の話だったので、お会いしたことも、お話ししたこともない。自分が生まれてから、自分が会って話したことのある親族の中で亡くなったのは、父の伯父、伯母、そして、母だった。母が亡くなったのは、今（2003年8月）からおよそ3年半前、1999年（平成11年）11月27日（土）PM8：00頃 だった。私は16歳、2学期の期末直前だった高校1年生の冬のことである。最愛の母を思春期で、反抗期の時に失ったこと。今でも、鮮明に覚えている母の闘病生活。意外と思い出せなくなってしまった母の明るい日常。この課題を聞いた瞬間から、私は誰のエッセーを書くかは決まっていた。そして、実際に半年間でエッセーを書き上げたのだが、私はとにかく英語が大の苦手。できあがった自分の稚拙なエッセーを見て、あまりに母を語るには足りなすぎて……。そこで授業とは全く関係なく、母国語で思うがままに母のことを書いてみたのが、同エッセーである。母の闘病生活を中心に書いたが、ただ悲しい話を書きたかったわけではない。これは、私の母の自慢話である。こんなステキな女性が自分の母親であること。私とその母にこんなに愛されていたこと。そして、今の私があること。すべてが自慢話であり、母は私にとっての誇りである。自己中心的な考え方で書いた文章だが、目を通してくださるとありがたい。（以上は、執筆当時（19歳）のホームページに掲載していた紹介分を一部改訂した内容である。）

私が母と共に過ごした時間なんて、私が生まれてから母が亡くなるまでのたったの16年間で、それは母の人生の3分の1にも満たない。私が知りうる限り母のことを語っても、いったい私が母の何を知っているのかと、問う人がたくさんいるかもしれない。しかし、別に私は作家でも何でもないし、本を出版するわけでもないから、エッセーを書くために特別母のことを調べたりはしなかった。本当に自分勝手に書いた文章なので、先にそれをお詫びしておく。

母という人

私の母は昭和24年4月8日に4人姉妹の三女として生まれた。あまり裕福でなかったため、狭い家で子供も家事をしながら生活していたと聞いている。よく兄弟の真ん中は出世するだとか、変わり者が多いだとか聞かすが、母も例外ではなかったと思う。彼女は要領が良く、頭も良かったため、学校の成績は小さい頃から優れていたようで、他の姉妹で複雑な思いを抱えていた者もいたようだった。母は都立のトップ高校へ進学し、理系としての素質をどんどん開花させていくが、遊ぶのも大好きだった母は、大学は第一志望の東京大学に落ち、当時の二部校・農業工業大学へと進学した。母のことを表す言葉はいろいろ思い浮かぶ。頭が良い。理系。短気。大雑把。外面がいい。背が高い。そして、健康美。などなど。「健康美」とは母が亡くなった後、お通夜や告別式で参列者等から良く聞いた言葉だ。母は、テニスや登山を好み、自転車で隣の駅まで買い物に行くような、元気な姿が印象的だった。また、いつも笑顔で、その笑顔がまたみんなの中では印象的だったようだ。母を表すのに「健康美」という言葉は、ぴったりだと思った。

子宮筋腫

中学3年生の時、2学期の期末を終え、そろそろ冬休みという時期に突然母が入院すると言い出した。実は、前から決まっていたことだったらしく、心配をかけないように子供の試験が終わるまで待っていたらしい。子宮筋腫の手術のためだった。今まで感じたこと無い腹痛を感じたため、病院に行ったところ、そう診断されたらしい。恥ずかしいことだか、私は病名そのものをその時初めて知ったので、どんな病気なのか、全く見当がつかなかった。「筋腫を取っちゃえば、それで終わりだからたいした事ない病気よ。お母さんの妹も受けたことのある手術だから、心配しないで。2週間くらいで退院するわ。」母はそう言って入院した。入院した先の病院は、家から徒歩5分程度のところで、手術当日も病院のすぐ側を学校からの帰宅中に通った。いつもの事だ。その時、病院から出てきた父と伯母に会った。彼らの暗い表情を見て非常に心配になり声をかけたが、今日はもう遅いと家に帰ることになった。翌日から、学校帰りに毎日病院に行った。たくさん管につながれた母を見てびっくりしたが、いっぱい話しかけて、親孝行をしている気分になっていた。後で聞いた話だが、母はこの時、術後の痛みがひどくて、私の話に付き合うのは非常につらかったらしい。数日後、個室から大部屋に移った母に笑顔が戻っていた。ここまで来たらもう安心だと思い、とても嬉しかった。年配の方が多い病棟をうろうろしていた中学生だった私は、看護婦さんにもよく声をかけられた。そんな看護婦さんたちにも祝福されながら、母は元気に退院した。母の子宮筋腫が完治し、家族でいつものようにお正月を過ごした。母は、すっかり元気になっていて母の退院直後は気を使っていた、私たち家族もだんだんと気に止めなくなり、日常は戻っていた。母は、私たちのこの冷たさに少し不満を感じていたようだった。

女子高生

私は中学校を卒業し、都立の中堅高校に進学した。当初は偏差値が割りと高めの高校を志望するものの、勉強が嫌いだった私は、努力をそんなにしないでいける高校を選んだ。高学歴がそろそろ我が家の家系で、エリート街道から外れることは、かっこいいことのように思えたのだ。私は兄二人を持つ3人兄弟の末っ子だが、すぐ上の兄が当時、学区内トップの高校に当然のように進学し、後に合格し進学することとなる東京大学を目指す受験生であったため、口には出さなくとも心の中ではずっとコンプレックスだった。しかし、「いい高校行ったから何なんだ。」とよく口にしながら、自分の学歴なんてどうでもいいと思うようになった。むしろ不良になりたかった。ギャルとかヤンキーとか本当にかっこいいと思って、憧れだった。そういう意味で、我が家の特に父方の家系は男の半分以上が東大卒だったり、絵に描いたようにエリート街道に行く人ばかりだったので、自分の憧れとは対極だった。でも、本当は違う。私は、兄やみんなみたいに優等生にもなりたかった。密かにそんなエリートの家系の中でも、自分は頭が良いほうだと思っていたのだ。優等生願望と不良願望が半々だった私は、とりあえず高校生になったら、スカートを短く切って、ルーズソックスを履き、髪を染めて「女子高生」を満喫しようと思った。中学に引き続き、絶対にやろうと思っていた陸上も、部活自体が盛んじゃなかったのを理由に何もしなかった。

休日の朝

高校に入学したばかりの4月下旬の休日、母親がいつまでも寝ている私を起こしに来た。「いい加減に起きなさい。」そう言いながら、ふざけて私のベッドに乗っかってきた。末っ子で甘えん坊だった私は、起こしに来た母にじゃれついていた。すると母が「見て。目が黄色くなっちゃったのよ。」と言いながら、確かに白目が黄色くなってしまった母の目を見せてきた。「こういうのって何かの病気の症状だったりするのよね。病院行ったほうがいいかしら。」私も生まれてすぐに黄疸病にかかっていたので、確かに病気で黄疸が出ている可能性はあると思った。何より、子宮筋腫の手術を最近受けたばかりだったので、母の体が心配になり、「うん。絶対すぐに行ったほうがいいよ。それでたいしたこと無ければ安心できていいじゃん。また入院したくないでしょ？」と母に病院に行くように促した。「そうねえ。」と言う母にくっついたまま、朝食を食べにダイニングに向かった。私は、この何気ないやり取りを鮮明に覚えているのは、これがまさか母の過酷な運命を物語るきっかけになるとは思っていなかったからだ。

再入院

母とは仲が良かったが、私は反抗期だったので、衝突も多かった。母は、だらしのない私が心配の種だった。それが、私はうざかった。家にいるのがだんだんめんどくさくなってきた時期だった。ゴールデンウィーク直前のある日学校から帰ってきた時、別に何が嫌というわけでもないが、いつものように弁当箱を台所に投げつけた。家事を手伝いもしない傲慢な娘の私だったが、弁当箱を洗ってもらうために出すことすら、面倒でむかついてしょうがなかった。しかし、その日投げつけた先に母の姿は無かった。「あれ？お母さんは？」思わず側にいた兄に聞いた。よく家の中を見ると、何故か普段は仕事で家にいない父が何かを調べるかのように必死で本を読んでいた。「お母さん、また入院だって。」兄の言葉に耳を疑った。あの目に出てきた黄疸を病院に見せに行ったところ、すぐに入院するように医者から言われたらしい。入院先は、子宮筋腫の時に入院した所と同じ病院だった。「何で？何の病気だったの？」兄にそして父に大声で聞いた。「何かおそらく肝臓らへんの病気だから肝炎とかだろうけど、まだよくわからないんだ。」父は、それを必死に調べているようだった。「全治どれくらい？治る病気だよな？また手術なの？」他にもいろいろ聞いたが、結論が出るわけも無く、眠れぬ夜を過ごした。

翌日、高校は授業が無く芸術鑑賞教室と称して、映画を見に行った。映画は確かに面白かったが、私の頭の中はそれどころでは無かった。帰りに友人からご飯に誘われるが、断り本屋に直行して「家庭の医学」をはじめとする医学に関する本を何冊か立ち読みした。A型肝炎、B型肝炎、
・・・全治は・・・手術は・・・その他の治療法は・・・どういう病気なのか・・・どうしてなるのか・・・必死に調べた。自分の教養の無さを痛感した。今となっては詳しい内容は忘れてしまったが、とりあえず治る！というより治す！！と心に決めて、その足で今度は母のいる病院に直行した。病院で、見覚えのある看護婦さんたちがいた。彼女らに聞いて母を探し、ちょうど何かの検査を終えて、検査室から出てきた母に会った。「あら、来てくれたの。」意外と元気そうな母に少し安心した。「結局何の病気なの？」病室に戻ってすかさず投げかけた質問だった。「もうGWになっちゃうから、詳しい検査結果は連休明けみたいなんだけど、肝炎じゃなくて胆のうの病気みたいなのよね。」母もよくわからないようだった。とにかく母を元気付けたかったので、「そっか！まあどんな病気でもちゃんと治せばいいだけの話だもんね！！今は癌だって治っちゃう時代だし！」と言いながら私は、最近見たテレビでやっていた末期癌を克服した人の話をした。「あのね、もう末期癌で余命半年って宣告されたおじいちゃんの話なんだ。でも、もう70代だったし、あと半年も生きれりゃ充分！ってその人は告知された時に思ったらしくて、暗くならなかったらしいんだ。で、その半年間をできるだけ楽しく生きたかったから、大好きな漫才の本を読んだりしては、毎日大爆笑してたら、癌が治っちゃったんだって！！」これは、本当の話でNK（ナチュラルキラー）細胞と呼ばれる細胞が癌細胞に効くらしいのだが、そのNK細胞は笑うとたくさん出るらしい。素人の不確かな知識だが・・・とにかく癌には笑うといいんだ。というような話で盛り上がった。この時、割と軽い気持ちで話したが、母が病気を治す勇気の少しの足しにでもなればと思った。

癌とかじゃないし

母が入院して以来、私は毎日のように病院に通った。GWが明けて、あの白目に出てきた黄疸を治すために、母のお腹には穴が開けられ、そこから胆のうに直接管がつながれ、そこから、不要なドロドロとした液体を常時排出されるようになった。穴を開けるときは痛かったようだが、母はいつも笑顔でお見舞いに来た私を迎えてくれた。しかし、結局何の病気なのかよくわからず、私は医師たちに対して不信感をつのらせるようになった。以前の子宮筋腫のときは、子宮に出来た筋腫を摘出し、術後回復し次第、退院。と言ったように、入院から退院までの流れが私にも明確だったから良かったものの、今回は病名も治療方針も当時の私にはさっぱりわからず、また誰も教えてくれなかったので、不安な日々が続いた。「まあ、癌とかじゃないし、すぐ治って退院できるでしょ。」何気なく発した私のその一言に母は、「癌だって治るでしょ？」と言り返した。こないだの話の続きかと思い、私は「うん。癌だって治るから、他の病気なら尚更楽勝だよね！」と軽く答えた。その時にほっとした表情を見せる母に少し違和感を感じたことを覚えている。帰り際に「何か持ってきて欲しいものある？結構泣ける漫画とかあるけど。」と言うと、「笑える面白い本とか持ってきてよ。」と母は答えた。このとき、既に母は知っていて私の知らないある一つの事実が存在したことに私は全く気付く事が出来なかった。今の私なら、きっとわかっただろう・・・。

母の病名

母が入院してからもう2ヶ月が過ぎようとしていた。1学期の期末試験を終え、家でダラダラしていた時、父と一番上の兄が暗い面持ちで、私と受験勉強をしていた2番目の兄をダイニングに呼び出した。この時、上の兄は大学2年生。下の兄は高校3年生。私は高校1年生であった。「お前ら期末は終わったな？」父は高校生の私たち二人にそう確認をすると、「お母さんのことで話がある。」と言った。私は、やっと病名がわかるんだと思い、直感的に少しほっとした。しかし、父の話は期待を裏切るとてもつらい事実を知らされるものだった。「お母さんさ、ずっと入院してるけどな、実は・・・癌なんだ。」目の前が真っ白になるってこういう事をいうんだと思った。自分の心臓の鼓動が聞こえる。そう、母は胆のうを癌に侵されていた。そして、母は既にその告知を受けていたらしく、「頑張ります。」と一言医者に告げたそうである。「そうだったのか。だから・・・」頭の中でいろんなことが回った。出てきた涙は止まらなかった。私はよく泣くけど、こんなつらい涙を流したことは無かった。そして私たちにすら黙って、治療をすぐに決意した母を尊敬せずにはいられなかった。最初に癌だって治る。と言ったのは私。私たちは母の癌の完治を信じて闘う事を選んだのは当然のことであった。実際に治ると思っていた。ただし、自分のまだ始まったばかりの高校生活は母の看病に終わるかもしれないという覚悟はあった。長期戦になることを雰囲気を感じ取っていた。

親不孝

病名がわかったからといって治療方針が決まるものでもなかった。現状はあまり変わらなかった。母が日々どんな治療を受けているのか、どうやって今ある癌を無くすのか。私には全くわからなかった。手術をするかも。という話を聞いた。しかし、いつの間にか手術は出来ないという話になっていた。私まで届かない大人たちの会話。父と医者が。父と親戚の大人たちが。いくらまだ高1だからって私はお母さんの娘なのに。私だって母を治すのに協力したいのに……。そういうジレンマはずっと尽きなかった。私に出来ることは毎日病院に通っては、面白い話をして母を笑わせることくらいだった。親不孝者の私は精一杯親孝行をしてるつもりになりたかった。でも本当は母が好きだから、会いたいから、話したいから、近くにいたいから、病室に毎日足を運んだだけだった。母の白目の黄疸は少しずつ無くなり、良くなっているんだなと実感し始めた夏休みに母は一時退院した。本当に自分が情けなくなるが、不思議なもので家に帰ってきていつもどおりの生活をしている母を見ていると、また安心してしまい、家事を母にまかせっきりで自分は、外に頻繁に遊びに行くようになった。あの子宮筋腫の治療から帰ってきた母を気遣っていたのが一瞬だったように、また今回も一瞬で母の心配をしなくなっていた。その後も時々、治療のために一週間ほどの入退院を繰り返していたが、母が明るく振舞うのを見て、母が癌に侵されていることなど、頭からすっかり離れてしまっていた。今も、この頃のことには後悔と反省の気持ちしかない。自分は最低だと思う。なぜなら、この時も確実に母の体の中で癌は進行していたからだ。

夏が終わり、母はまた本格的に再入院した。一時、ひいたかと思われた母の黄疸は気がつけば全身に広がっていた。「早く黄疸ひくといいねえ。」などと声をかけつつも、そこまでに深刻に受け止めていなかった自分がいた。不安は不安だった。本当に治るのかと心配でたまらなかった。しかし、今思えば、私はその事態の深刻さの半分にも気付いていなかったのだ。あの頃の私のお見舞いの様子を語れば、母は紛れも無く「母」であり、「患者」ではなかった。接する場所が病室に移っても、私たちは常に「親子」だった。私は洋服が欲しい。化粧品が欲しいと愚痴を言っただけで、母が説教してきて、時々ケンカにまで発展してしまい、泣きながら私が病室を飛び出したこともあった。もっと勉強しなさい。部活をやりなさい。と母が言えば、めんどくさいと私は話題を変えていた。母が入院するまでお手伝いもまともにしなかった私は、当然料理の経験値ゼロだったが、ようやく始めた料理の腕を母に見て欲しくて、肉じゃががおいしくできた！とか、グラタンを手作りで最初から作った！などと言いながら、出来立ての料理を持って、家から病院まで走ったことも何度かあった。そのたびに母は、病院食よりも私の料理を優先して食べてくれ、「おいしい。よく頑張ったね。また作ってね。」と言ってくれた。このいつまでも崩れない「親子関係」は一見当たり前のようだが、あくまで母は自分が癌に侵されている状態。誰よりも不安で仕方なかったのは、母なのにそういう素振りを私たち子供には見せまいと必死に頑張っていたから、私たちは「親子」でいられたんだと思う。あの時は、そんなことは思わなかった。でも今は、心からそう思う。

最後の授業

10月頃になると、母は週末に一時退院の形で家に帰ってくるようになった。母は、全身の黄疸が取れないままだった。元気に歩いていた母もやがて、よぼよぼと歩くようになった。しかし、それでも私たちの会話は相変わらずだった。11月の上旬、私は高校の数学で確率を習っていた。P（順列）とかC（組み合わせ）とか、問題は解けるものの今ひとつ納得がいかなかった。母は数学が得意だった。上の兄も受験の時、母によく数学を教えてもらっていた。我が家で数学や物理のノートを食卓で広げることは日常だった。私は病室で、母に数学を教えてもらっていた。もやもやが取れて数学のその単元に関して、とてもスッキリしたのを覚えている。「ありがとう。よくわかったよ。」そう言うと母は「またわからなくなったら、持ってらっしゃい。」と言った。さすがお母さんと思った。しかし、母に勉強を教えてもらうのはこれが最後となった。

ある週末にいつものように母が帰宅してきた時のこと。母は椅子に座るのもままならなくなり、家でも寝てばかりだった。そんな母の足はパンパンに腫れ上がり、全身の黄疸は悪化しているように思えた。どうして治すために治療しているのに、良くなるまいだろうか？という疑問が、そして言いようの無い不安が押し寄せてきた。そして、病院にまた戻る時、母は既に一人で歩けなくなっていた。私の呼びかけにもあまり答えなくなってしまう、普通に会話が出来なくなってしまう。病室に戻った直後、駆けつけてきた医者に「どうされました？」と言われて、母は自分で体調を報告していたので、まあ大丈夫か・・・。と思い、その日は病院を後にした。

翌日、家に電話がかかってきた。取ったのは私。相手は上の兄だった。「今、俺お母さんの病院に来てるけど、病室変わったから！」と新しい病室を報告してきた。その時、嫌な予感がしたのだ。母の様子が気になり、新しい病室に行くと、やはりそこは個室だった。大部屋から個室に移されたのだ。良い事じゃないのは、すぐにわかった。母は「お兄ちゃんの高校から借りてきたそのマットを返しに行ってもらわないと・・・。」などと口にした。意味のわからないその発言にドキッとした。案の定、その日の夜、家族全員が再び食卓に集められた。その時、父が口にした言葉は

「お母さんはもう12月までしか生きられない。」

小学校の時以来、見たことの無い兄たちの涙。信じられない。絶対に嘘だ。涙が止まらない。息をするのも苦しいくらい、打ちのめされた気分だった。だって自分の親が死ぬなんて、いつかは起こることだけど、高校生の私に考えられたわけがないじゃない。もう希望を持つことも許されないのか。何より、お母さんはもっと生きたい！って思ってるに決まってる。一番死にたくないのはお母さんなんだから。神様、私が死んでお母さんが助かるなら私を殺してください。この時、初めて人のために死んでもいいと思った。母に死なれるよりも自分が死んだ方が絶対に楽だと思ったから。

それでも娘が心配

肝臓付近の病気というのは、最終的に脳を侵してしまうらしい。母は幻覚を見るようにもなった。話すことも時々意味がわからなくなってしまい、目の前に誰がいるのかわからない状態になったりもした。食べれば吐いてしまう。それでも母が少しでも食べれるように、さっぱりとしたシャーベットやゼリーを随時買ってきては食べさせていた。ずっと前に母と一緒にテレビを見ていて、テレビに出てきた痴呆症やアルツハイマーの人たちを見て「お母さん、私の事わかんなくなっちゃったらどうする??」と聞くと、「そうねえ。わからなくなりたくないけどねえ。」などと話していた。ある時、病室で母と二人きりになった時、母に声をかけると「娘が・・・私の娘の華江はどこですか？華江を探しているんです。」と言われた事があった。私はたまらなくなり、母の手をつかんで「お母さん！私だよ！華江だよ！ここにいるよ！！」と母の目をじっと見つめた。「ああ華江か・・・。」とほっとした表情を見せたときに、こみ上げてくる涙を押さえて胸が熱くなった。こんな状態でも私をわかってくれたこと。それ以上にこんな状態でも私を探してくれたことが嬉しかったのだ。今、やっとわかる。母が私を本気で心配してくれていたこと。お母さん、勉強するよ。お母さん、運動もするよ。お母さん、お手伝いもするよ。お母さん、望むことは全てするから、死なないで。生きて。お願いだよ。

母はうつろうつろとした半覚醒の状態でした。そんな中でも、兄弟そろってお見舞いに行ったとき、力をふりしぼるようにして発した言葉は「お母さんは、まだ頑張る。だから、君たちも頑張れ！」もう余命いくばくも無い母はまだ闘っていた。私達はそんな母の前では、いつでも笑顔でいようと決めていた。それでもそんな母を見てあふれる涙を堪えきれず、隠すように、花瓶の水を変えに病室を出た。すると、廊下で懐かしい人に会った。その人は、以前母が子宮筋腫の治療で入院していた時にお世話になった看護婦さんだった。母が癌で入院した当初は何度か会ったが、ここ最近では会っていなかった看護婦さんだった。「華江ちゃん、最近会えなかったから。でも、心配で・・・」押さえていた涙がまたすごいあふれた。「だって私、お母さんに何もお礼できてないよ。絶対にやだ！！」とわけがわからなくなるくらい大泣きした。看護婦さんは私を抱きしめてくれ一緒に泣いてくれた。そういう看護婦さんは一人じゃなかった。母は、きっと看護婦さんからも尊敬されていたんだと思う。そんな母に、私は毎日会いに来てたから、病院でも顔が広がった。これだけの人の心を動かす母はやっぱりすごいよ。本当にすごい。母が頑張るなら、私も最期の最期まで母が治ると信じて、一緒に闘おうと思った。

旅立ち

その最期の時は割とすぐに来た。私は、1999年11月26日（金）、学校の授業を2限で早退し、いつものように病院に向かった。ここ数日は学校にも事情を話してよく早退していた。「お母さん！笑顔作るよー！作り笑いでも効果あるんだからね！」と言いながら、二人でにやにやしていた。母は本当に力ない笑いだったが、私は思いきり笑ってやった。この頃父はずっと病院に泊まりこみで母の看病をしていたが、私が来たので父は用事を済ませに外に出ていた。そして、父が戻ってきてしばらくしたら、夕食を食べに私は一度家に帰った。家族全員がいた。またその日は伯母も来てくれ、夕食にハンバーグをたくさん作ってくれた。7時半過ぎ。夕食を食べ終えた我が家に、病院にいる父から呼び出しがかかった。母の容態が悪化したのである。駆けつけた時、母は苦しそうにしていた。父と医者との決断は鎮静剤を打つことだった。そうすれば、ゆっくり眠れるから。でも、2度と目を覚まさないかもしれない。しかし、それを止める者は誰もいなかった。今の苦しそうな母をとにかく楽にして欲しいとその時は強く思った。そして午後8時ごろ鎮静剤が打たれた。しかし、なかなか母は眠れなかった。母の生きようとする強い意志がそうさせるのだろうか。母の目にはいっぱい涙があふれていた。深夜、何時ごろだろうかもう忘れてしまったが、母はようやく眠りについた。眠らないまま夜を明かした私は、翌日27日（土）の夕方、病室内のソファで少し眠ってしまっていた。すると、誰かに慌てて起こされた。病室には私たち家族のほかに当直の医師と看護婦の数人が母のベッドを取り囲んでいた。母の口には呼吸マスクが取り付けられ、非常に激しく息をしていた。母の死が近いことを感じ、母の手をぎゅっとにぎった。やがて、激しい息使いがおさまり、母は大量に赤黒い液体を吐いた後、静かに息をひきとった。医師が瞳孔が開いているのを確認し、静かにそれを告げた時、私は母のまだ温かい体にしがみついて号泣した。この世に神様なんかいない。奇跡なんか起こらない。だって本当に神様がいるなら、お母さんみたいな素晴らしい人を見殺しになんてするはずないんだ。強くなろう。一生懸命生きよう。お母さんが悲しまないように。お母さんが私を産んでくれた事。たった16年間だったけど、一生懸命育ててくれたこと。感謝なんて言葉だけじゃ表しきれないこの思いを自分の人生をかけて見せていこう。その時、強くそう思った。

最後の言葉

後にわかった事だが、母を死に追いやった「胆のう癌」という病気は非常に見つかりにくく、母のように分かりやすい症状が出てしまった時点で、既に末期だったらしい。母がそれを知っていたのかはわからない。しかし、母が感じていた不安は想像を絶するであろう事は、今はわかる。そんな状態でも、私たちに泣き言は一切言わなかった。私たちに本当に治ると信じ込ませるくらい、母は強く強く頑張っていた。母の最後の言葉……。そう、あの鎮静剤を打たれる直前に、もう聞こえないくらいかすかな声で

「……ごめんね。」

そう言ったのだ。母は自分が死んではいけないと思っていたのだろう。まだ私のように16歳の子供もいた。最期を看取るはずだった父という夫もいた。母を産んでくれた祖母もいた。母は自分が諦めちゃいけない立場だったことを自覚し、本当に最期の最期まで闘い抜いたのだ。

今（19歳）、そしてこれからの私

私は、最期の最期まで母に心配をかけっぱなしだった。母は私の誇りである。母にとっても誇れる娘でいたいと思った。何が出来るかって言われたら、何も出来ないけど、母の言うとおりに、勉強を頑張ろうと思い、慶應義塾大学を受験し合格した。部活をやろうと思い、SFC内で探し、タッチフットボールを始めた。母は、その闘病生活中に言っていた。「若い時に鍛えたこの体が今の私を支えてくれている。」と。確かに、母はスポーツを絶えず続けていた。言われた時は何も感じなかったが、今考えると、母の中で体力の限界を感じながら、話したことだったのではないかと思う。

今の私が、あの時母に誓ったことほど頑張れていないことは誰が見ても明らかだと思う。自分の悪い癖が出てきた時、母の最期まで闘うあの姿を思い返しては、自分自身も立て直すようにしている。あと何年かかっても母に納得してもらえそうな自分になれるかはわからないけど、何事も一生懸命で、そして人生を楽しんでいこうと思う。

母に最期に言った私の言葉は「お母さんのような女になって幸せになるよ！」

お母さん、私はあなたの娘で本当に良かった。

私のお母さん

<http://p.booklog.jp/book/79419>

著者 : bambi817

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/bambi817/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/79419>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/79419>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ